令和６年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 西原 小学校 ）　　学校番号　０９９

【様式】

目指す学校像	「学び」でゆるやかにつながる「みんなの学校」～多様性と包摂性、それを支える寛容性の実現～

重点目標	1　児童一人ひとりの学習スタイルに応じた学習活動の推進 2　一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を大切にする学びの「時間」「空間」「仲間」の充実 3　探究的な学びを地域全体で支えるスクール・コミュニティの実現 4　学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての教職員の育成

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日　令和７年２月１０日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	＜現状＞ ○昨年度までの研究で「さいたま市小・中一貫教育」を推進し、一小・一中の地の利を生かして、円滑な接続を図るための取組を行ってきた。 ＜課題＞ ○「さいたま市小学校教科担任制」を円滑な実施を継続することで、中学校の指導体制のよさを小学校に取り入れるとともに、小・中の学びの連続性を強化できるようにする。 ○児童の学習観を更新し、「学びを自分事に」することで、学力の向上につなげる。	「学びの自律化」の推進による学力向上	①日常的に「学び方」「情報活用能力」の習熟を図る授業づくりに取り組む。 ②授業の中で児童が選択する機会を多く設定し、自律的な学習を促進する。	・各種学力調査において、「平均正答数別人数割合の全体平均との差」について、上位層のピークと中位層のピークの差を４問以内にすることができたか。	全国学力状況調査においては、ピークの差が６問と目標に達成することができなかったが、概ね６割は達成することができた。	B	より一層、中位層が上位層により近づくよう、課題解決のモチベーションが高まるような授業展開の工夫と児童一人ひとりの学習スタイルに応じた「学び方」が身に付くようにする。	・重点目標にあるように誰一人取り残すことがないように、児童一人ひとりのスタイルに応じた学習活動の取組を引き続きお願いしたい。 ・思考力の高い子と低い子のギャップが激しい。 ・学びの自立化が必要。 ・自分の口から言葉が出るように持っていってほしい。
		ＩＣＴ活用を進んで行う	①自律的な学びのアイテムとして「ＩＣＴ」を活用し、自律的な学習を行えるようにする。 ②教職員の「ＩＣＴ」の研修を進んで行う。	・タブレット活用について、学校評価のアンケートで児童と保護者の肯定的な意見を昨年度より増加できたか 児童：（R5：73.8%→R6：79%） 保護者（R5:46.2%→R6:50%）	・タブレットの活用については、 児童：（R５：73.8%→R６：64.2%） 保護者：（R５：46.2%→R６：36.3%） 目標値よりも下がってしまった。これは、タブレットを使用することが日常的になってきたのでこのような結果になったと考えられる。	B	教職員もタブレット活用について R５：63.6%→50%に下がっている。おはようメーターなど毎日使用しているが、「どの場面で使用することが有効なのか」を情報交換や研修をする必要がある。	
2	＜現状＞ ○学校や教室に行きづらい児童のための学習スペース（通称オアシスルーム）の運用が始まっている。 ○昨年度の学校評価アンケートの、いじめ認識について児童の肯定的意見が83.9%であった。 ＜課題＞ ◯整備した自主学習ルームを活用して、児童の学習不安の解消に資する取組を推進する。 ○オアシスルームの周知を図り、家庭と学校をつなぐ踊り場としての機能を充実する。 ○豊かな関わり合いを通して、多様性を最大限に尊重する雰囲気を醸成する。 ○全学年において、積極的ないじめの認知を行い、重大ないじめ事案に発展しないよう、積極的な生徒指導をおこなう。また。組織的に早期発見、早期対応を行うことが重要である。	特別な教育的支援を求める児童に対する組織的なサポートの実現 オアシスルームを活用して学習支援や心のケアを行っている。引き続き、ボランティア等も含めた支援体制の整備を進め、児童にとって「心が元気になる場所」の確保	①オアシスルームを活用したサポートを実施する。 ②目白大学と連携し、リハ専門職による特別支援学級へのサポート及び教育相談を実施する。 ③特別な教育的支援を求める児童に対するサポートプランを作成する。 ④アシスタントティーチャーや校内ボランティアによる支援体制を整備する。 ⑤スクールロイヤー等の外部講師を招聘した研修を行い、教職員の危機管理意識を高める。	・オアシスルームの運用マニュアルを作成することができたか。 ・目白大学との共同研究「リハ専門職連携プロジェクト」の成果をさいたま市教育委員会事務局学校教育部特別支援教育室と保護者に報告することができたか。 ・いじめ認識についての学校評価アンケートの児童、保護者、教職員の肯定的な意見を増加できたか。 児童：（R5：83.9%→R6：86%） 保護者：（R5:46.9%→R6:50%） 教職員：（R5:48%→R6:60%）	・オアシスルームの運用マニュアルを作成することができた。説明会も開き、使用する児童にも分かりやすく運用ができている。 ・目白大学との共同研究「リハ専門職連携プロジェクト」は、夏休みに教職員に向けて研修をおこなった。そして成果を保護者や特熱支援教育室に報告する予定である。。 ・いじめ認識についての学校評価のアンケートの児童、保護者、教職員の肯定的な意見は 児童：（R５：83.9%→R６：80.59%） 保護者：（R５：46.9%→R６：46．１%） 教職員：（R５：48%→R６35%） 目標値よりも残念ながら減少した。 ・夏休みにはスクールロイヤーを招聘し学校の教職員向けて研修をおこなった。	B	年々不登校の児童、教室に入れない児童が増加している。今後、持続可能な形でオアシスルームが安定的に運用するためには、教職員も含めた校内ボランティアの支援体制を整備することが急務である。 目白大学の作業療法士・理学療法士との教育相談の件数が昨年度に比べて増えてきた。（のべ、６人）担任からの紹介にもより、認知度が上昇してきた。 いじめの認識度が下がったのは大変残念である。特に今回はいじめの件数も多くなった。多くは、からかいや悪口から発生したものが多かった。	・不登校や教室に入れない児童が、気持ちが落ちつき、自信をもって生活できるようにオアシスルームの活用をし、一人ひとりの多様な幸せに結びつけたらと思う。児童センターが居場所の候補として協力できないでしょうか。 ・いじめ問題について、アンケートで肯定している児童がいる。教育の課題、家庭での声掛け、親の背中を見て育つ。家庭の中で挨拶しているとか。いじめはダメだということを言い続けていくことが大事。
3	＜現状＞ ○西原小・中学校合同のコミュニティ・スクールが円滑にスタートした。 ○開校当初より、郷土学習として取り組んでいる岩槻の人形づくりについて、総合的な学習の時間（STEAMS TIME）に位置付けた。 ○児童と地域の方が気軽に交流できることを目的とした「コミュニティルーム」を設置した。 ＜課題＞ ○学校運営協議会において、熟議を深める。 ○整備した学習計画や学習環境に基づき、実践を充実する。	コミュニティルームをプラットフォームとした、児童と地域の方の交流や学び合いの機会の継続的な設定	①コミュニティルーム内の環境整備を進めるとともに、運用ルールを作成する。 ②コミュニティルームの設置について、地域関係者に周知する。 ③コミュニティルームを活用して、地域の方同士の交流や、児童と地域の方同士の交流を実施する。	・郷土愛について学校評価アンケート保護者と児童の肯定的な意見を増加できたか。 児童：（R5：72.4%→R6：78%） 保護者：（R5:21.2%→R6:30%） ・西原中学校と合同で実施している学校運営協議会の実施方法を一部各校開催することで、熟議の時間を充実させ、地域・保護者の願いを実現できたか。	・コミニティルームは昨年度と比べて、利用率は増え、２学期まででのべ889人の児童が利用をした。 ・郷土愛の保護者の肯定的な意見は、昨年度と比較して、ほぼ児童は変わらず、保護者は微量に増加した。 児童（R5：72.4%→R6：72.0%） 保護者（R5：21.2%→R6：25.9%） ・年度より学校運営協議会の小学校ワーキンググループを作成した。昨年度の計画の通りｺﾐｭﾆﾃｨﾙｰﾑは、児童と地域の方との交流を開始している。地域の方は、自治会・体育振興会・隣接する訪問看護ステーションの職員の方・岩槻紙芝居保存会の方の連携も進めている。	A	コミュニティルームの運用にあたっては、容易な利用予約や犯罪も含めたより一層の安全確保を図る必要がある。 地域の方による学習ボランティアを発足し、放課後や長期休業中の学習支援の実施を目指す。 引き続き、コミュニティルームを拠点とした地域の方同士または児童と地域の方との交流会を仕掛けることで、学校に日常的に地域の方が出入りする状況を実現していきたい。 郷土愛については、学校からの発信が少なかったと考える。	・コミュニティルームを中心に児童や地域の方々が場所・時間を共有しながら地域の文化、歴史を感じて岩槻愛につなげていきたい。 ・岩槻・西原小中学区の魅力を子どもたちだけでなく、保護者にも発信し、共有できたら良いかと思う。地元で育ち、子育てをしている保護者は意外に少なく、岩槻の良さを知られない方が多数いられるのではないでしょうか。
4	＜現状＞ ○教員免許更新制の発展的な解消に伴い、教職員のキャリアステージやライフスタイルに応じて、研修により一層主体的かつ計画的に取り組むことが求められている。 ＜課題＞ ○教職員人事評価制度における実績評価や研修の取組については、各個人で時間を生み出さなければならない。 ○ＩＣＴの活用により日々蓄積される教育データと教職員の経験を掛け合わせることで、教育活動の更なる改善を目指す。	教師自身の学びの転換を図り、教師が自ら問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、教師自らがデザインする。	①教師自身が、みずから主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動が取れる力を身に付け、児童の重要なロールモデルとしての役割を果たすことができるようにする。 ③教員一人ひとりが自身の課題意識に応じた個別の研究計画を作成し、互いの研究の成果や課題を学び合う機会を継続的に設定する。	・学習についての学校評価アンケートの児童、保護者、教職員の肯定的な意見を増加できたか。 児童：（R5：39.1%→R6：45%） 保護者：（R5:40.8%→R6:45%） 教職員：（R5:36%→R6:40%） ・教職員の人事評価シート「研修」の取組みについて、全教職員が８割以上の達成状況となったか。	・学習についての学校評価アンケートについては、児童、保護者は下がってしまい、教職員は目標を達成した 児童：（R5：39.1%→R6：37.9%） 保護者：（R5:40.8%→R6:38.7%） 教職員：（R5:36%→R6:40%） ・教職員の人事評価シートの「研修」の取組については。全員が８割以上の達成状況になった。	B	教職員一人ひとりの専門性や強み、キャリアステージやライフスタイルは多様であり、各自が必要とする研修内容も異なっている。 中央教育審議会において、児童の学びの姿と教師の学びの姿は相似形と指摘されており、教職員自身がテーマを設定して探究的に学ぶ機会の確保は、今後ますます重要となる。 各教職員が個別最適かつ協働的に研修を深めていくためのシステムを構築し、資質・能力の向上を図っていく。	・子どもたちが主体的に学習できるようにＩＣＴやＡＩを活用して一人ひとりが興味関心をもって学習できるような先生方が伴走者になるのは素晴らしいと思います。 ・教員がそれぞれ目標を持てるようにしてあげてほしい。 ・日々研鑽に取り組んでおられる教職員の皆さんに頭の下がる思いです。